クロスセッションを活用した研修の在り方

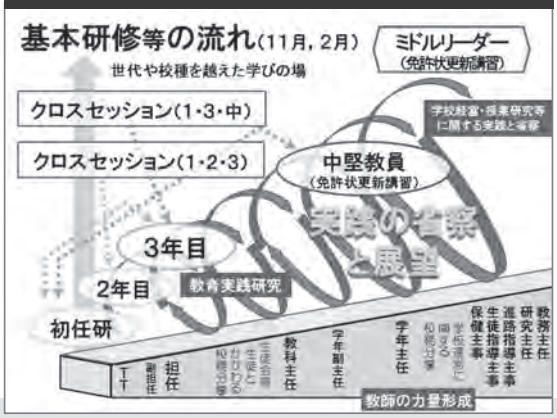
－教育研究所の新たな教員研修体系－

研修部　キャリア形成研修チーム

語りと傾聴により実践者の思いを語り合い、共有し学び合う場

平成29年度から、福井県の教員研修体系が大きく変わる。５年経験者研修を廃止し10年経験者研修を改訂した「中堅教諭等資質向上研修」、免許状更新講習に読み替えが可能な研修、継続的に研修が受けられるように考慮した「ミドルリーダー養成研修」等が新設される。それらの研修の軸として、平成24年度より導入され、定着しつつあるクロスセッションを活用する。クロスセッションの活用を取り入れた経緯を説明するために、研修者のアンケートを分析し、検証された効果をこの後実証していく。また、同時にいくつかの課題も見えてきた。すでに改善し実施しているものもあるが、新たに見つかった課題については、来年度の研修に向けて改善していく。

クロスセッションを核とした教員の資質能力の向上



	対象者	クロスセッションのテーマとねらい
平成29年度クロスセッション	初任者 ２年目 ３年目	（テーマ）教育実践研究（授業実践研究） （ねらい）世代間グループで授業実践事例を検証し、世代を超えて協働する力量を形成する。また、校種や教科は同一とし、専門性を深めるグループ協議とする。
	初任者 ３年目 中堅教諭	（テーマ）教育実践研究（教育全般） （ねらい）世代間グループで教育全般の実践事例を検証することで、世代を超えて協働する力量を形成する。また、校種や教科を解いたグループとすることで傾聴の力と省察力、ファシリテート力を高めるグループ協議とする。
	30歳代 40歳代 50歳代	（テーマ）30歳代:授業づくり 40歳代:気がかりな子どもの支援 50歳代:チーム学校 （ねらい）教育実践報告書を検証し、世代間、世代別双方のグループ協議で省察を深めることで、長期的な視点で自主的に学ぶ教員像を理解する。

アンケートの内容

10年経験者研修で実施されてきた「該当教員自己評価表」をもとに作成し、初任者と10年経験者に対しH26年度、H28年度に実施した。各年度とも、11月のクロスセッション終了時に実施し、参加して意識が変わったり、身についたりしたと思う点について調査した。平成26年度の初任者に関しては、経年変化などを調査するため３年間続けて実施をした。

アンケートから分かるクロスセッションの成果

平成26年度の初任者に対して3年間、10年経験者に対して２回（H26年度、H28年度）実施したアンケートにより、今年度比較して分析することができた。

ほぼ全ての項目で成長が見られた結果から、クロスセッションが初任者の力量形成に効果があったものと確信している。

表１　H26とH28の初任者の比較

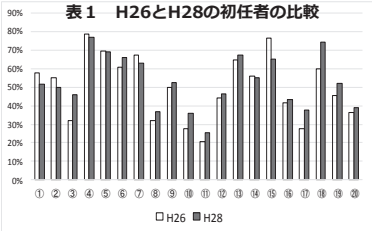


表２　H26とH28の10経年の比較

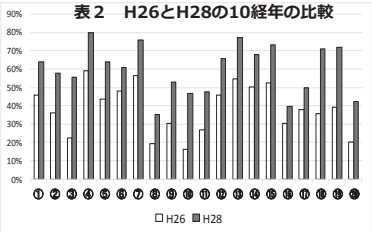
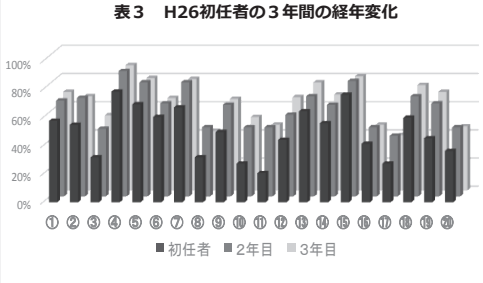


表３　H26初任者の３年間の経年変化



	研修体系の変更		クロスセッションの変更	
対象世代	平成28年度　→	平成29年度	平成28年度　→	平成29年度
若手	初任者 ２年目 ３年目 ５年経験者研修	初任者 ２年目 ３年目	初 2 5 初 3 10 10 10	初 2 3 初 3 中 中
中堅	10年経験者研修 中堅教員研修 (40～50歳代の中堅教員)	中堅教諭等資質向上研修 （免許状更新講習） ミドルリーダー養成研修		
中堅以降		免許状更新講習 免許状更新講習 マネジメント研修 (40～50歳代の管理職候補)		40 50

アンケート項目

①（教職全般）高い倫理観・幅広い視野
②（教職全般）教育の現状と課題の理解
③（人権教育）人権問題の理解と、確かな人権感覚
④（計画）　個に応じた指導方法の工夫
⑤（授業）　興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習の工夫
⑥（ICT活用）ＩＣＴ機器などの授業方法の工夫
⑦（学級・児童生徒把握）児童生徒の実態に即した、修正や改善
⑧（評価）　指導の改善や学習意欲の向上
⑨（言語活動）言語に対する理解や関心を深めた言語活動
⑩（家庭学習）家庭学習などの自主的な学習態度の育成
⑪（進路指導）自己の在り方や生き方を考え、主体的に進路を選択
⑫（生徒指導）生徒指導について、充実に向けた考え方
⑬（生徒指導）教育相談の手法を理解し、好ましい人間関係づくり
⑭（生徒指導）障害のある児童生徒の教育ニーズの把握
⑮（組織マネ・協働）他教員との連携協力。報告・連絡・相談
⑯（自己マネ）個人の役割を理解し、自己ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ能力
⑰（今日的課題）校種間連携など今日的課題への取組み
⑱（危機管理）事故や問題への対応。個人情報保護
⑲（家庭・地域・関係機関との連携・協力）
⑳（社会の動向への対応）新たな工夫・改善

「学び続ける教師」を支えるために

ー教員研修の在り方を考えるー

研修部　授業改善研修チーム

平成26年度～平成28年度
授業改善研修チーム目標　「教員の自主的な研修のための環境を整備し、教員の研修意欲を向上させる」

社会が求める新しい学び → 新しい教育課題 → 「チーム学校」で対応

《子供たちにつけたい力》 → 《子供たちに力をつけるための方法》 → 《教職員が支え合う体制づくり》

思考力・判断力・表現力を育てる授業は？　子供たちが自主的に取り組むためには？
ＩＣＴを活用するには？　チームで解決するためのやり方って？
カリキュラム･マネジメントってどうやるの？

…他にも、アクティブ･ラーニング　思考ツール　課題意識　評価のあり方
探求的学習　チームで取り組む　ふるさと教育　主権者教育…等々

学びたいこと → 研修意欲！

実践型集合研修

目標：教職員としての資質や力量および教科等の専門性の向上をめざす。

実践型…学んだことを授業実践につなげる

		平成26年度	平成27年度	平成28年度
講座数	専門研修	58		
	実践型	22	42	40
受講者数（延べ）		3,700	1,688	1,482

直後アンケート

平成28年度　総合満足度　3.8（満点4）
特に満足度の高い項目
　講師に対する満足度　平均3.8
　進行に対する満足度　平均3.7
満足度の低い項目
　理解度に対する満足度　平均3.6

追跡調査　FAXアンケート

調査項目	H26	H27	H28
研修内容の活用度	34.7	41.2	40.6
受講者の変容度	76.7	80.3	83.4

受講者の変容度は高いのに、研修内容の活用度は低い！

講座内容に対する関心は高いが、実際に活用するためにはもうひと工夫が必要なのではないか？

◎演習内容やグループ協議を充実させる工夫
・グループ構成の工夫…経験や男女バランス
・講師からの具体的なアドバイス
・実際の授業に即した内容で

活用度UP

通信型研修

目標：教職員として必要な基礎的･基本的な内容を身につける。

通信型…経験を力に変えていくためのベースづくり

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
講座数	48	100	124
登録者数(累積)	1,586	3,020	4,359
受講者数(延べ)	1,375	4,444	4,679

平成28年度は12月末現在

＜通信型研修の受講スタイル＞
基本研修の事前教材
実践型集合研修の事前教材

集合研修における演習の比率をアップ

視聴数の多い講座（上位5つ）

通信型研修講座名	関連する集合研修
これで納得アクティブ･ラーニング	3年目研修　高校書道　アクティブ･ラーニング
学級づくりシリーズⅠ	2年目研修　学級経営
キャリア教育の基礎	初任者研修　5経年研修　10経年研修
ファシリテーションの基礎	2年目研修　3年目研修　10経年研修
人権教育	初任者研修　10経年研修　人権教育

◎受講後アンケートより
・新しい知識や知見を得ることができた
・重要事項の再確認ができた
・授業や指導に取り入れて活用したい

使える！通信型

さらに…

最新の情報を配信　→　新しい教育課題に対応
講座の質の向上　→　１００講座限定配信

実践型集合研修 ・演習･交流･省察 ・資質･専門性向上

学び続ける教師

・最新の情報 ・基礎･基本の習得 通信型研修

校内研修のさらなる活性化を目指して
ー訪問研修の成果と今後の展望ー

研修部　校内研修支援チーム

過去３年間の取組み

訪問件数の増加　H25 297 件

H26 576 件 → ○訪問研修の周知
○市町教育委員会等との連携

↓

H27 646 件 → ○研修後アンケート調査の分析
○継続的支援

↓

H28 730 件 →

●福井県教育研究所における訪問研修の内容

教科指導に関する支援 ○市町教委と連携した訪問、各教科研究会での授業づくりに関する支援 ○研究授業等での授業づくり等に関する支援 ○実技指導等に関する支援　など	**情報教育に関する支援** ○授業におけるＩＣＴ機器活用やその活用による授業づくりに関する支援 ○情報モラル、学校情報セキュリティーに関する支援 ○ホームページ運営に関する支援　など
学校改善に関する支援 ○アクティブ・ラーニングに関する支援 ○学力調査の結果分析に関する支援 ○校内研修の活性化に関する支援など	**教育相談および生徒指導に関する支援** ○不登校、いじめ、発達障害等の理解と対応に関する支援 ○ＳＮＳ、ネットトラブルに関する支援 ○学級経営に関する支援　など

●支援内容別の変容と成果

教科指導に関する支援

【変容】	【成果】
○教科の枠を越えた支援要請が登場 ○新たな教育課題を意識した教科別授業づくりへの支援要請が増加	○市町教育委員会との連携強化 ○アンケート調査分析による支援内容の充実

情報教育に関する支援

【変容】	【成果】
○ICT 機器の具体的活用への支援要請に変化	○経験年数によって求める研修内容が異なることが明確化

学校改善に関する支援

【変容】	【成果】
○新たな教育課題についての支援要請が増加	○アンケート調査分析による支援内容の充実

●今後の研修支援の在り方

○過去３年間の取組みの継承

○各校における OJT 体制の構築を意識した研修支援

背景　教員の大量退職・大量採用時代、課題の複雑化・多様化、継続的な研修の必要性

学力向上に向けた「検証・改善サイクル」の推進

－学力調査の活用－

調査研究部　学力調査分析ユニット

Ⅰ　はじめに

1　学力調査分析ユニットについて

○設置の背景
　時代のニーズや教育の諸課題に対応
【主な取り組み】
　全国学力・学習状況調査、ＳＡＳＡの一括管理、　一括分析による学力調査分析

2　学力向上に向けた検証・改善サイクル

Ⅱ　ＳＡＳＡ（福井県学力調査）

○調査問題作成組織
○調査問題作成
　・問題出題設計
　・時間区分
　・マトリクスの作成
○Ｃチャレンジ問題
　・導入の背景
　・問題の位置づけ
　・問題の質の向上
○質問紙内容の改訂
　・学級集団についての質問項目
　・非認知能力
○調査結果分析の情報発信
　・速報、課題改善事例集を含めた報告書
○調査結果のデータ処理および出力
　・新システムの導入
　・個人票（ふり返りシート）

Ⅲ　全国学力・学習状況調査の分析

○組織体制
○分析内容・方法
　・サンプルデータの分析
　・統計解析ソフトを用いた分析
○調査結果に関する聞き取り調査
　・聞き取り調査の目的
　・調査内容
　・調査結果の情報発信
○情報発信
　・「速報」「福井県分析資料」の情報発信
　・指導改善の手引き

Ⅳ　今後の方向性

1，成果と課題

ＳＡＳＡ
（成果）総合的な学力をはかる問題設計
（課題）さらなる問題の質の向上、活用の推進

全国学調
（成果）速やかな児童生徒への学習指導
（課題）各教育機関との連携、分析技能の向上

2，次年度に向けて

ＳＡＳＡ
・Ｃ問題の枠組み
・小学校「英語」（第5学年）調査問題の研究
・質問紙の研究

全国学調
・統計学的手法を用いた研究

学校現場における学力調査の活用推進に向けて
－学力調査の活用に関する現状と課題－

調査研究部　学力調査分析ユニット

福井型　学力向上サイクル

学力調査分析ユニットが行う
学力調査に関する「訪問研修」の目的

①学力調査の目的
②学力調査問題・結果の分析方法
③学力調査の活用方法
について

現場の理解と授業改善を促進

平成26年度
○ 学力調査の分析と資料の作成・配付
○ 指導主事連絡協議会（全国学調分析対策会議）で説明

平成27年度
○ 学力調査の分析と資料の作成・配付
　→ ◎ 福井県教育研究所HPから速やかに発信
○ 指導主事連絡協議会（全国学調分析対策会議）で説明
◎ 全市町の校長会・教頭会で説明
◎ 教育研究所「基本研修」で説明
◎ 学力調査に関する「訪問研修」の実施
　→ 11件（小学校6校、中学校2校、市町3件）

・教育庁関係機関と連携強化
・「訪問研修」を広く宣伝
・研修部校内研修支援チームと連携

平成28年度
○ 学力調査の分析と資料の作成・配付
　→ ○ 福井県教育研究所HPから速やかに発信
○ 指導主事連絡協議会（全国学調分析対策会議）で説明
○ 全市町の校長会・教頭会で説明
◎ 教育研究所「基本研修」や国語・算数/数学の「実践型集合研修」で説明
◎ 学力調査に関する「訪問研修」の実施拡大
　→ (1)学校ごとの訪問研修　14校（小学校12校、中学校2校）
　　(2)小中連携事業、市町教育委員会ごとの訪問研修　4件
　　(3)県外　2件

学力調査の活用推進に向けて

○成果　・「訪問研修」の内容・構成の開発・実施
　　・市町教育委員会への「訪問研修」による学力向上サイクル構築の支援
●課題　・発信する情報の活用状況の把握　　・継続的な支援内容の研究
　　・学校全体で取り組む体制づくりや教員の意識改革を促す支援のあり方

高校数学における授業改善の３年間の歩み
－主体的な学びを生む授業の浸透と深化を目指して－

調査研究部　数学ユニット

昨年までの概要

高校数学の現状と問題点

1　旧態依然とした講義型の授業
2　受け身の姿勢の生徒
3　数学に興味を持てない生徒

【H25年度数学指導改善実行会議で示された授業改善の3つの方向性】

1　生徒が自ら学ぼうとする学習スタイルを確立する　―　第１グループ
2　協働的な学習を行うことで生徒の学びを深める　―　第２グループ
3　変化を持たせ、「数学は面白い」と感じる授業を行う　―　第３グループ

H26年度の取組み

高校教育課、研究協力校、数学ユニットが協働して実践研究を行った。

第１グループ（３校）
『予習的課題を前提とした授業』の研究

第２グループ（２校）
『グループ活動を取り入れた授業』の研究

第３グループ（４校）
『ＩＣＴを活用した授業』の研究

「高校数学における授業改善」報告書の作成

「予習的課題を前提とした授業」通信型研修配信

H27年度の取組み

授業改善の取り組みを広める活動と深める活動を行った。

県内の全ての高校の公開授業への参加

「数学ユニット通信」による情報発信

生徒の学びを見取る授業研究会の提案

授業動画視聴による振り返りの実施

第１グループ（３校）
予習的課題に取り組むことで学習の見通しを明確に持ち、生徒が主体的に学ぶことができる授業の研究

第２グループ（４校）
協働して課題解決に取り組むことで生徒の思考活動が促され、学びが深まる授業の研究

第３グループ（５校）
ＩＣＴの利点を活かして学習内容を具体化し、生徒の意欲と理解を向上させる授業の研究

Ｈ28年度の取組みと課題・成果

- 県内の全ての高校の公開授業への参加
- 「数学ユニット通信」による情報発信
- 生徒の学びを見取る授業研究会の提案
- 授業動画の撮影による授業実践事例の蓄積
- 授業改善事例集の作成
- 若手教員自主学習サークルへの支援

予習型授業研究グループ（３校）
予習的課題に取り組むことで生徒が学習の見通しを明確に持ち、主体的に学ぶことができる授業の研究

授業づくり研究グループ（２６校）
協働して課題解決に取り組むことで思考活動が促され、生徒の学びが深まる授業の研究
ＩＣＴの利点を活かすことで学習内容が具体化され、生徒の意欲と理解が向上する授業の研究

αブロック（12校）
βブロック（9校）
γブロック（5校）

研究協力校の全県的な拡大に伴い、県内全高校を３つのブロックに分けた新たな実践研究体制を構築する。

第２グループと第３グループを統合して、多様な授業展開による実践研究を行う。

成果

（1）数学教員が授業を公開し合い、授業研究をすることにより、授業改善に対する意識改革が進んだ。
（2）研究協力員への授業訪問を実施し、参考にすべき指導上のポイントを数学ユニット通信として発信した。
（3）３年間の歩みを検証し、授業改善事例とともに報告書にまとめた。

課題

（1）現状の年１回程度の授業訪問では、継続性がなく、十分な授業改善とはなっていない。
（2）手応えや肌感覚に頼った授業づくりだけではなく、根拠に基づく授業づくり研究を行うことが課題である。

Ｈ29年度の展望（案）

□実践協力員との双方向型遠隔通信システムによる授業モデル作成サイクルの導入
□教員版自己評価表・生徒版自己評価表の開発とそれを基にした科目別単元別授業モデルの作成

拡大から深化へ

実践協力員
学習指導案を立案し、その学習指導案を数学ユニットと検討協議して、授業を実践する研究協力員のこと

授業モデル作成サイクル
「実践協力員による学習指導案の立案→学習指導案の検討と協議→教員版・生徒版自己評価表の作成→実践協力員による授業→教員版・生徒版自己評価表で授業を振り返り検証し、授業モデルを作成する」サイクルのこと

科目別単元別授業モデル
数学Ⅰ・数学Ａ・数学Ⅱ・数学Ｂ・数学Ⅲの科目ごと、単元ごとに授業モデルをまとめたもの

到達目標を意識した指導改善と評価
ー「福井県英語学習CAN-DOリスト」を基にしてー

調査研究部　英語ユニット

「福井県英語学習CAN-DOリスト」作成のねらい

・小中高一貫した到達目標を作成し、校種間の連携を図る。
・各学校が自校版のCAN-DOリストを作成し、授業で活用する際の参考となる資料を作成する。

教師にとって

授業改善
評価改善

教師・生徒・保護者が到達目標を共有

生徒にとって

明確な目標・学びの見通し
自分の立ち位置の確認
メタ認知力育成

作成資料

平成26年度	「福井県英語学習CAN-DOリスト	・小中高を見通した到達目標 ・各学校でCAN-DOリストを作成する際の参照枠として活用
平成27年度	児童・生徒版「福井県英語学習CAN-DOリスト」	・小中高を見通した到達目標 ・各学校でCAN-DOリストを作成する際の参照枠として活用
	「学年到達目標CAN-DOリスト」モデル	・学年修了時の到達目標
	生徒版「学年到達目標CAN-DOリスト」モデル	・学年修了時の到達目標
	「自己評価表」モデル	・授業やパフォーマンステストの 後に生徒が振り返りを行うた め の自己評価表
	「パフォーマンステスト自己評価表」モデル	・授業やパフォーマンステストの 後に生徒が振り返りを行うた め の自己評価表
平成28年度	「自己評価表」モデル（修正）	・授業やパフォーマンステストの 後に生徒が振り返りを行うた め の自己評価表
	「パフォーマンステスト自己評価表」モデル（修正）	・授業やパフォーマンステストの 後に生徒が振り返りを行うた め の自己評価表
	「単元別CAN-DOリスト」モデル	・学年到達目標CAN-DOリストを もとに、単元別に設定した目標

研究実践と検証

研究協力校

市立中学校1校	県立中学校1校	県立高校（職業系）1校

・生徒の変容を見るための実践前後の意識調査
・CAN-DOリストを意識した授業と、自己評価表の活用
・パフォーマンステストの実施と、パフォーマンステスト自己評価表の活用

教師の変容

・到達目標を意識した授業設計ができるようになった。
・生徒にモデルとなる多くのinputを与えることを意識したため、英語の使用機会が増えた。

生徒の変容

・繰り返し自己評価を行うことで、具体的な振り返りができ、学びの見通しが持てるようになった。
・あらかじめ評価項目を知ってパフォーマンステストに臨むことで、意欲的な取組みにつながった。

次年度へ向けて

・生徒の意欲づけによりつながる自己評価表の研究
・小学校英語教科化を踏まえたCAN-DOベースの授業づくりと評価方法の研究
・CAN-DOチェックシートの作成
　生徒：中学・高校入学時や学期末に自身の到達度を測ることで、課題を明確化する。
　教師：生徒の課題を知り、指導に活かす。

小学校における英語絵本の読み聞かせの研究

―担任が無理なく取り組める手法を探る―

調査研究部　英語ユニット

「学校で取り組む小学校英語教育推進『スクラム』プロジェクト」（義務教育課）

児童：
日常的に英語に親しむ

教員：
英語力・指導力の向上を図る

- ラジオで「英語」にふれる時間
- ALTと協働で授業力UP!
- 授業研究で高め合う
- **絵本の読み聞かせ**
- 英語の環境づくり
- 校内放送で英語

英語絵本の読み聞かせの研究

研究の目的	・児童が英語に慣れ親しむ手段として、効果的な読み聞かせの方法を探る ・児童の学年、発達段階に応じた絵本を選定する
研究協力校での実践・効果検証	・5年生での読み聞かせの実施 ・意識調査 福井市内小学校 1校　坂井市内小学校 1校
英語絵本の活用研究会	・アドバイザーによる講義 ・英語絵本の読み聞かせワークショップ

成果

読み聞かせの様々な手法が明らかになった。
- 児童にあらすじや話の展開を類推させるための手法
- 児童参加型の雰囲気づくりのための手法

読み聞かせの際の留意点が明らかになった。
- 教室の環境
- 児童の座らせ方
- 教材提示装置やブックスタンドの活用

「英語の絵本活用リスト」を作成した。
- 題名、著者名、出版社名、価格、内容紹介、対象学年、コメント
- 一覧表と帳票でリスト化

課題

- 教師が日本語と英語の使用量のバランスを取ることが難しい。
- 児童の英語力と絵本の内容にギャップがある。

次年度へ向けて

- 外国語活動の授業で教材の一部として活用できる絵本の研究
- 低学年や中学年での読み聞かせ実践
- 「英語の絵本活用リスト」の改訂

大学入試を突破する力を育てる学力向上策の研究

ー 求められる学力育成に向けた意識改革を目指して ー

調査研究部　大学入試制度改革ユニット

学力向上に向けた流れ

社会の変化
求められる資質･能力の変化
（知識重視から思考力･表現力重視へ）

高大接続システム改革
高等学校教育改革
大学教育改革
大学入学者選抜改革

情報の収集と発信
新大学入試情報　情報収集
学力分析データ　学力調査

学校の変容
大学入試に向けた突破力育成
意識改革と指導法改善

ユニットによる情報の収集と発信の取組み（平成28年度）

情報収集

予備校
文部科学省
書籍
インターネット
東京事務所
県内進学校との協働による高校視察

収集する情報
- 高大接続システム改革関連情報
  大学入学者選抜改革関連情報
  高大接続実践先進校の実践例
- 進学実績を伸ばす進路指導法
- 学力を伸ばす学習指導法

県内の学校で活用できる情報
- 思考力や表現力を伸ばす学習指導法に関する情報
- 新大学入試に向けた進路指導対策に関する情報
- 新大学入試に向けて高校の意識改革を促す情報

学力調査

協働
教育研究所大学入試制度改革ユニット2名
高校教育課進学支援グループ3名
普通科高校教諭80名

福井県到達度確認テスト（問題･解答･解説作成）
- １年　１月（国･数･英、マーク式）
- ２年　７月（国･数･英、マーク式）
  １月（国･数･英･地歴･理、マーク式）
- ３年　８月（記述式）文系：国･数･英
  理系：英･数･理（物･化）

出力データ
- 県全体の平均点、正答率、各選択肢の選択率
- 各高校の学級別得点一覧、平均点、正答率、各選択肢の選択率
- 各生徒の点数、順位、設問ごとの正誤一覧

分析結果のまとめ
- 誤答分析をふまえた学力の状況と課題
- 課題をふまえた指導に関するアドバイス

ユニット通信（年6回発信）／通信型研修（年2回配信）／訪問研修（要望に応じて随時）

平成28年度の成果と課題

成果
- ○ユニット通信６回発信（５月、７月、10月、11月、２月、３月）
- ○通信型研修２本発信
  12月「変わる大学入試ー見えてきた改革の内容ー」
  ２月「動き出した中学入試改革ー多様な能力を評価する入試導入へー」
- ○予備校等のシンポジウムや研修会で高大接続関連情報収集（５回）
- ○SGH指定校の授業見学（高志高校）
  ・注目すべきポイントをユニット通信で紹介
- ○関東の先進校視察
  （高崎高校、国立高校、青山高校、鷗友学園）
  ・県内の普通科高校4校と協働
  ・進学指導エキスパート教員研修の一環として実施

課題
- ○福井県到達度確認テストの作問･分析の改善
- ○小･中学校の教員の意識改革を促す情報提供

学校現場と協働したアクティブ・ラーニングの研究
ー「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてー

調査研究部　アクティブ・ラーニングユニット

これからの未来
・生産年齢人口の減少による国力の低下
・グローバル化、情報化の進展
・多くの仕事がロボットに代替される可能性

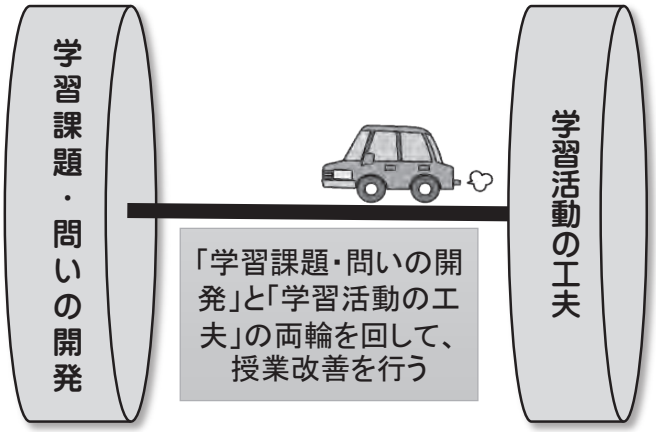
↓

めざす子供の姿
時代の変化に合わせて自ら学び考え行動する子供

↓

めざす学校の姿
子供たちに求められる資質・能力は何か、そのための子供たちの学びをどうデザインするかを問い続ける学校

教育研究所が考える アクティブ・ラーニングの指針



H28年度の取組み

研究指定校5校との協働研究

ALユニット
◆要請に応じた訪問研修
◆指導案検討会への参加
◆授業研究会、連絡協議会への参加
◆アンケートの分析（５月・２月）

研究指定校５校
金津中学校
明倫中学校
松岡中学校
武生第一中学校
小浜第二中学校

要請に応じた訪問研修の実施

研修内容例
◆ＡＬの概要説明
◆課題設定や学習活動の事例紹介
◆指導案検討会や授業研究会に参加しての継続的な支援

※27年度実施数　小学校9校・中学校5校・高等学校4校
※28年度実施数　小学校5校・中学校9校・高等学校1校
小中合同の研修会3件・教科の研究会2件
（1月末現在）

実践事例の蓄積・精査・発信

◆文部科学省　田村　学　視学官から得られた知見
◆先進的な取組を紹介する全国レベルのセミナーから事例収集
◆小中高の公開授業・研究発表会から事例収集

↓ 精査・分析

ALユニット通信（全5号発行）
通信型研修（入門編・授業づくり編の2本）

成果
☆訪問研修を通じて、指導案検討会や単元構成段階からの授業づくりに関わり、ALについての共通理解を進めることができた。
☆ALユニット通信、通信型研修、ALユニットアドバイザーの田村学視学官から得た知見を広めることによって、学校現場にALの方向性について正しい理解を示せた。

課題
★県立高校に対する訪問研修が少なかった。
★ALに関する評価やカリキュラム・マネジメントに関する研究まで至らなかった。

H29年度の方向性
☆指導案検討会や授業研究会に参加する継続的な支援を拡大し、県立高校に対する訪問研修を増やす。
☆ALに関する評価とカリキュラム・マネジメントに関する研究を進め、ALユニット通信発行、通信型研修配信によって共通理解を進める。
☆教職員を対象にしたALユニットアドバイザー田村学視学官講演会を開催する。

望ましい学級集団育成についての研究（Ⅲ）

―小学校 におけるソーシャルスキル、中学校におけるピア・サポート を中心 とした実践研究 および教師の学級経営 に関する指導行動 についての 質問紙の作成 ―

教育相談部研究ユニット

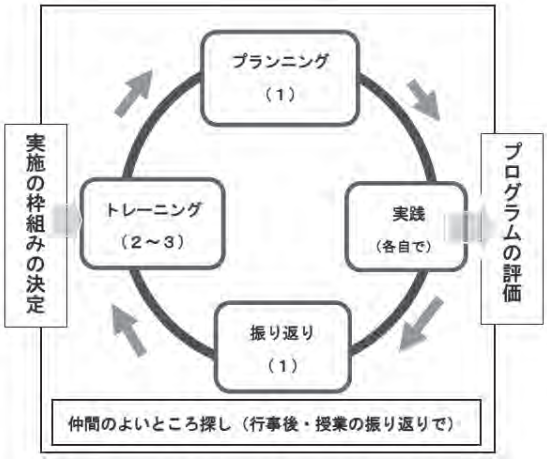
実践研究：3年間にわたって、小学校と中学校それぞれの望ましい学級集団育成のためのプログラムを作成し、その効果を検証した。以下がその完成版である。

小学校：プログラムの構造図と指導内容例

低学年	中学年	高学年
聴くスキル	聴くスキル	聴くスキル
関係づくり ・あいさつ ・自己紹介 ・いいとこ見つけ	関係づくり ・温かい言葉 ・気持ちの理解	関係づくり ・断り方 ・頼み方
	自己・他者理解 ・感情理解	自己・他者理解 ・感情理解 ・気持ちの切り替え
仲間のよいところ探し（行事・授業の振り返りで）		

このプログラムでは、月１回の頻度で学習を行う。最も重要なスキルは「聴くスキルであると考え、全学年で、まず学習し、定着を図る。次に、低・中学年では、関係づくりスキルへ、高学年では関係づくり、さらには自己・他者理解へと発展させていく形が基本形。学級の状態に応じて、学習するスキルを選ぶことが重要。定着が不十分な場合は、そのスキルに戻り再学習する。継続して実践することが効果を上げるために最も重要である。

中学校：プログラムの構造図とトレーニングの活動例



活動名とねらい（○）
ピア・サポートトレーニング 「心地よい聴き方について考えよう」 ○話し手の立場に立ったよい聴き方について考える。
「気持ちを読みとろう！」 ○相手の表情や口調などから、感情を読みとれることを知る。
「気持ちのよい話し方をしよう」 ○よい関係を保ちながらも、自分の気持ちや言いたいことを伝える言い方や態度があることを知る。
「上手な断り方」 ○適切な自己表現で、友達の要求を断る方法を学ぶ。
「うわさ話への対処法」 ○うわさ話には、ゆがんだ情報が含まれていることを知り、うわさや第三者を評価する質問に対する応答の仕方を学ぶ。
「悪いのだ～れ」 ○SNSでのいじめについて考え、解決策を話し合う。

このプログラムでは、既存の行事などを活用してピアサポート活動を行う。仲間の支え合い活動を通して、思いやりのある子どもたちを育て、思いやりのある学校風土をつくるために、活動に必要なスキルトレーニング（左表参照）を行った上で、プランニング・実践・振り返りを行う。プランニングと実践の例としては、球技大会で、苦手な子に教える、仲間を応援する等があげられる。さまざまな行事等にピアサポート的な要素を取り入れることでスキルの幅が広がり、定着が図れ、かつ学級が望ましい状態に変化する。

調査研究

学級経営に関する指導行動

予備調査を経て本調査（N=338）を因子分析した結果、4因子が確認された。信頼性と妥当性も確認された。今後の活用についての検討が課題である。

①子どもとの関係を作る指導（縦糸）
～ルール・役割遵守や公平性などで学びのベースを作る～

例：「ルールを示すときには、子どもが納得するような説明ができている。」「集団の規範となる行動や発言をみのがさずに、認めることができている。」

②子ども同士の関係を作る指導（横糸）
～アクティブラーニングが機能する良好な関係を作る～

例：「授業中に友達のやり方や考え方のよさを学び合う機会を設けることができている。」「学級をよくするための話し合いや活動が計画的にできている。」

③誰もが参加・理解できるための個別的配慮（UD）
～ユニバーサルデザインで全員を学びにつなげる～

例：「プリントや掲示物などを使って、なるべく目に見える形で情報を伝えることができている。」「学習支援など、必要に応じて個別に対応する時間をとれている。」

④協働性に基づいた指導（チーム）
～教師の“横糸”＝チームで育てる～

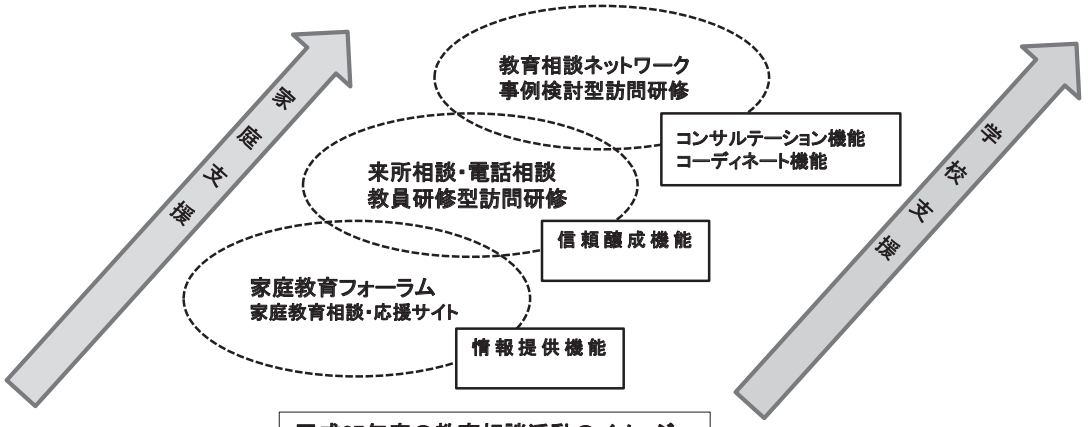
例：「困ったことがあったら、一人で抱え込まず、すぐに周りの教師に相談し、適切な対応ができている。」「学級や気になる子どもの話題を、普段から他の教師と話し合うことができている。」

教育相談部の業務の在り方について

ー新教育相談センターに向けて、その機能を検証するー

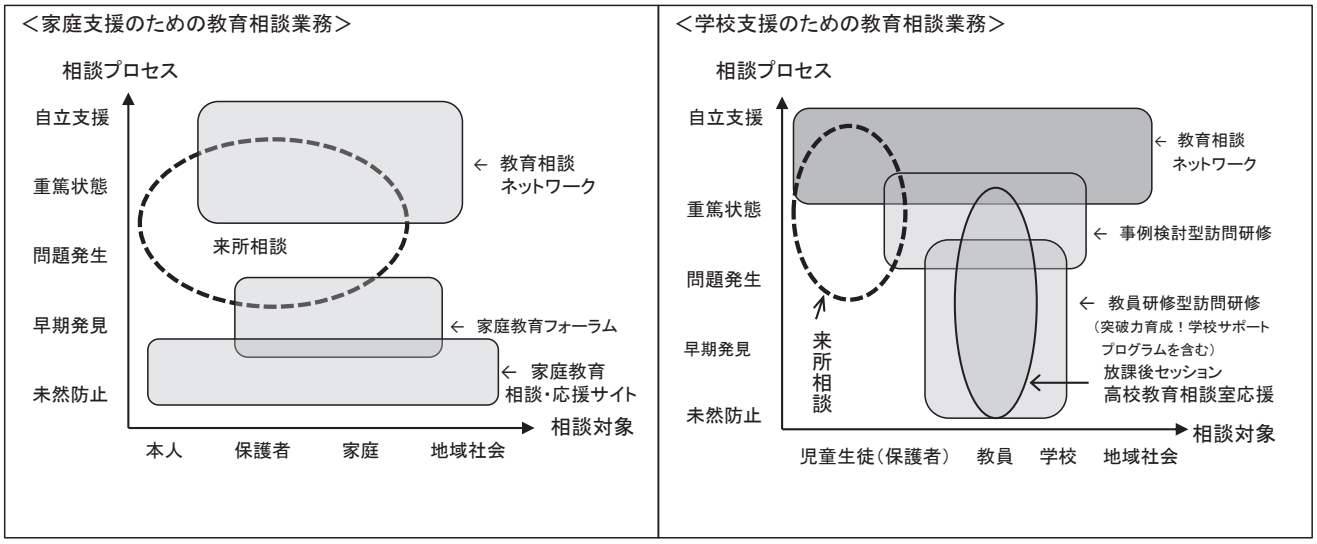
教育相談部機能強化チーム

3年間にわたり当部の業務を見直し、相談機能の強化を図ってきた。平成26年度に立ち上げた新規の業務を、平成27年度には、有機的に結びつけて相乗効果を上げることができた。平成28年度には、現在の相談ニーズにほぼ対応しており、一定の効果をあげたことが確認された。



平成27年度の教育相談活動のイメージ

平成27年度は、教育相談活動が家庭支援と学校支援を両輪にして行われた。
各新規事業の4つの機能を果たすために、部員のスキルアップが図られた。



平成28年度の教育相談活動のイメージ

家庭支援においても学校支援においても、相談ニーズは多岐にわたっている。
新規事業で機能強化を図った結果、多様な相談ニーズに対応することができた。
来年度は、SCやSSWなどの専門家を入れることで、さらに機能強化をめざすことになった。